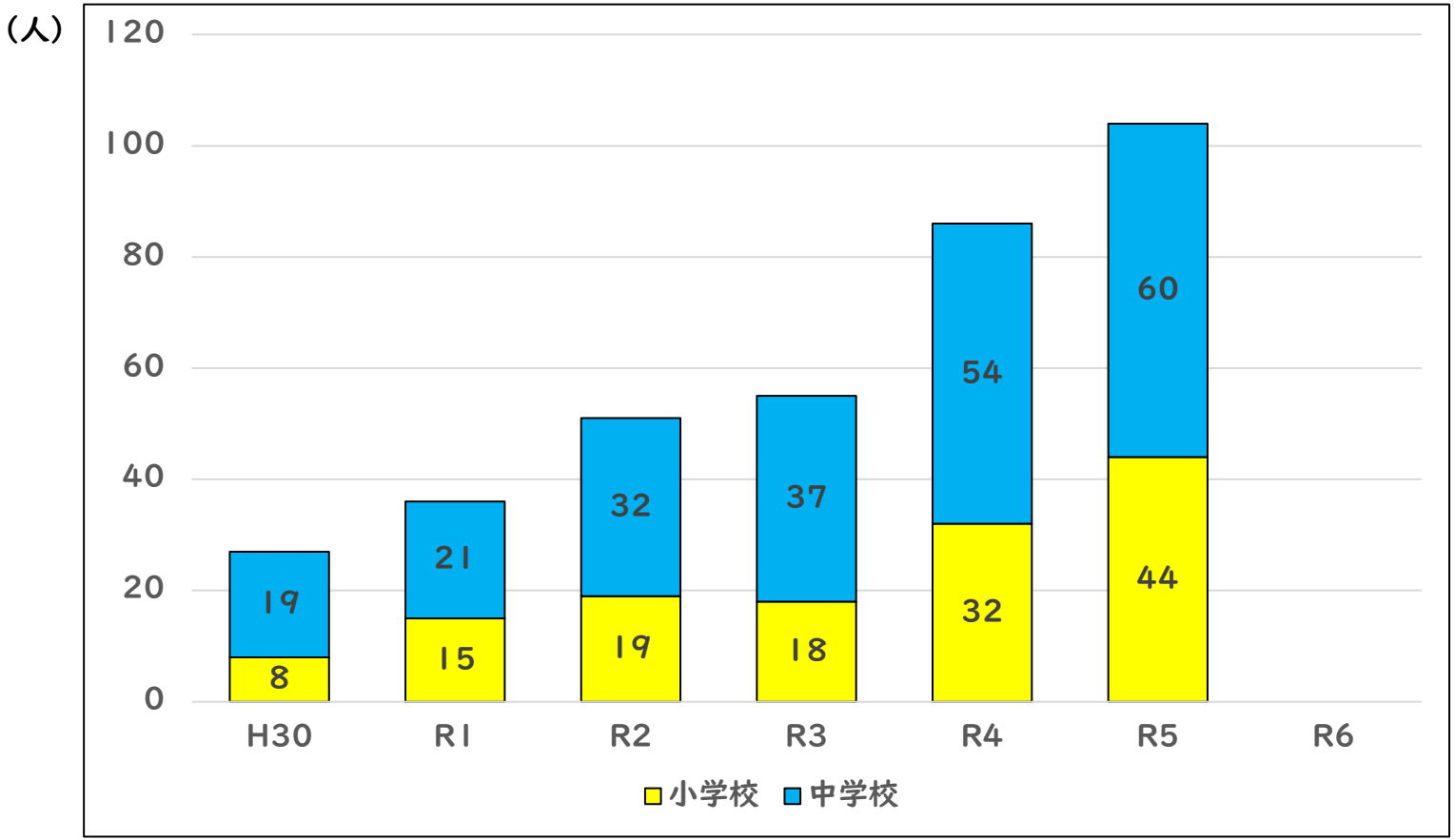
二宮町の不登校支援

令和7年1月30日（木）
二宮町総合教育会議
二宮町教育委員会教育指導課

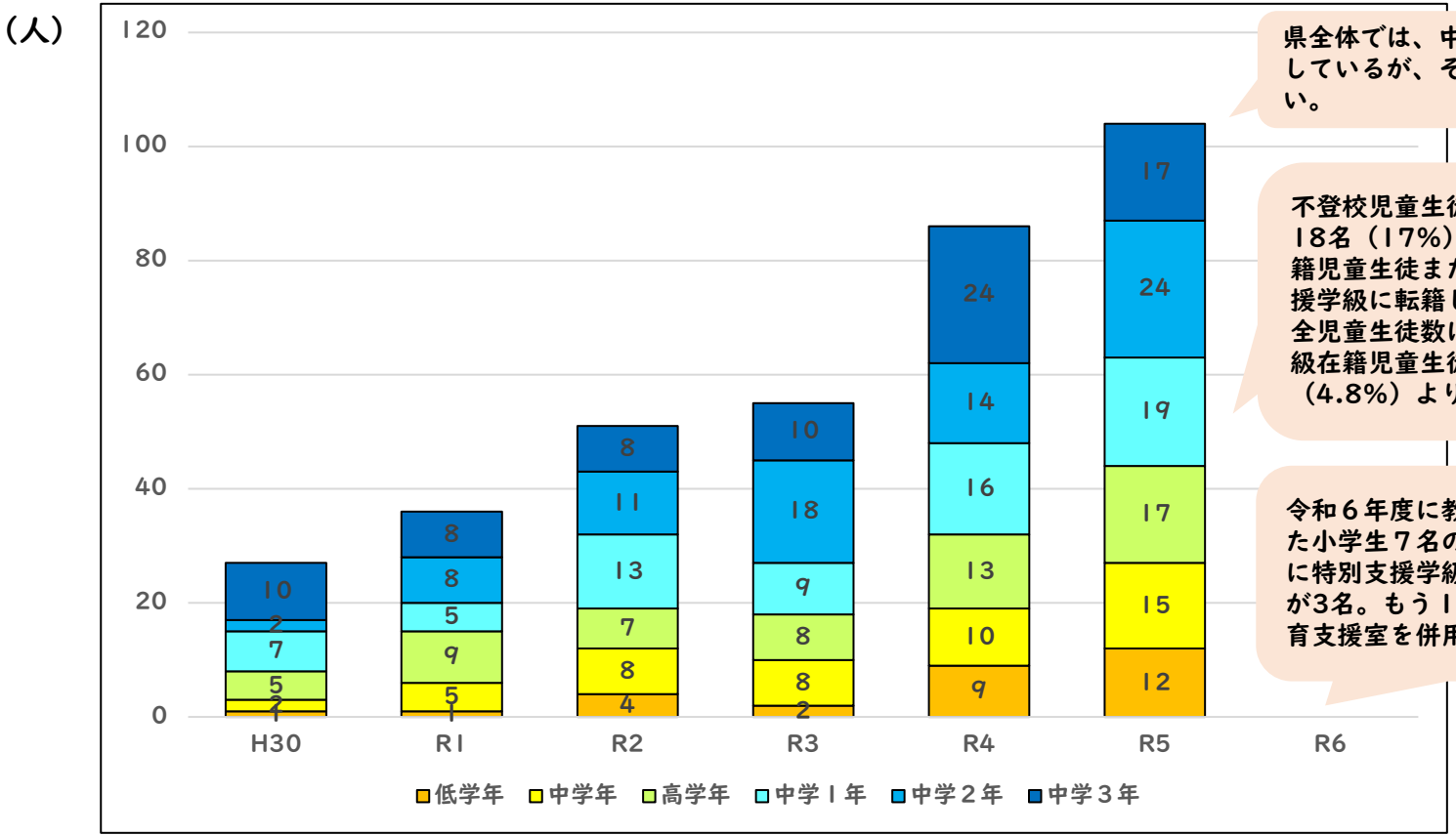
二宮町の不登校支援の評価

施策	・子どもたちの置かれている状況に合わせた重層的な支援を関係機関と連携しながら実施する。
現状	・依然として不登校の児童生徒数は多く、その割合も高い。 ・しかし、不登校の増加傾向に歯止めがかかってきた。 ・どこにも相談がつながっていないケースは０％ ・特に、規模が小さい学校から効果が出始めている。
分析	・早期発見、早期対応（早めのアセスメントとプランニング）が重要である。 ・専門職や関係機関と緊密に連携したチーム型支援は効果がある。 ・重層的に行うことが重要である。 ・施策の方向性は良い。 ・規模が大きい学校では、効果が出るまでもうしばらく時間を要するだろう。
今後	・現在の取り組みを継続する。児童生徒数が多い学校は、その取り組みをさらに強化する。

二宮町立学校の不登校児童生徒数の推移



二宮町立学校の不登校児童生徒数のブロック別推移

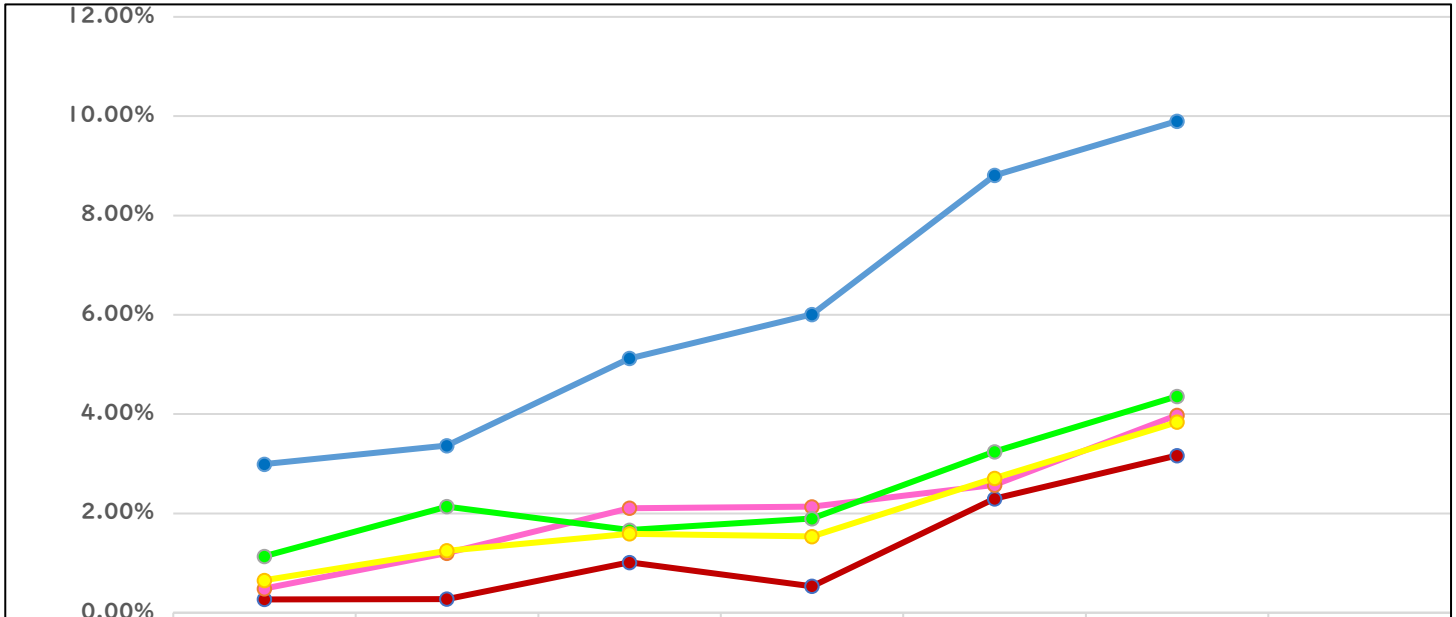


県全体では、中１で不登校が急増しているが、その傾向はみられない。

不登校児童生徒104名のうち、18名（17%）が特別支援学級在籍児童生徒または翌年度に特別支援学級に転籍した児童生徒であり、全児童生徒数に占める特別支援学級在籍児童生徒数の割合（4.8%）よりも高い。

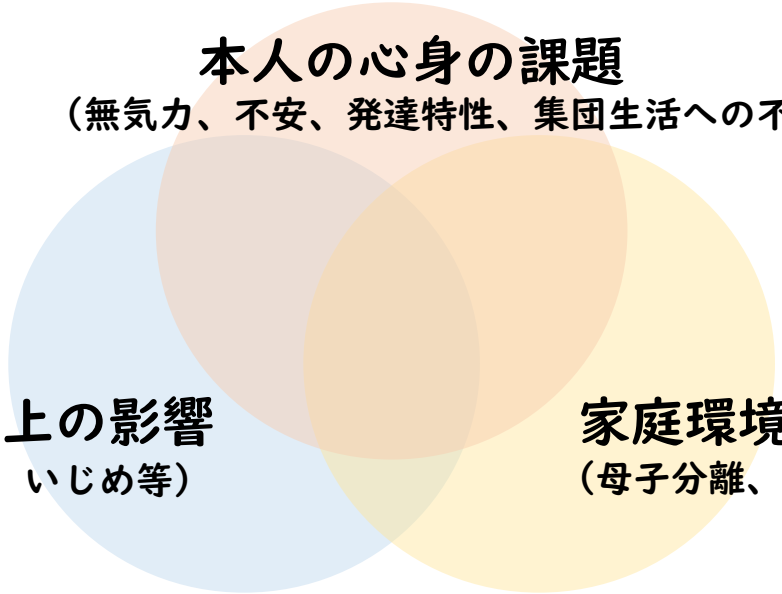
令和６年度に教育支援室を利用した小学生７名のうち、令和７年度に特別支援学級に転籍する小学生が3名。もう１名はリエゾンと教育支援室を併用していく。

在籍児童生徒における不登校児童生徒の割合の推移



	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	５年前からの増加率
低学年	0.27%	0.27%	1.01%	0.53%	2.30%	3.17%		11.9倍
中学年	0.48%	1.20%	2.11%	2.13%	2.57%	3.98%		8.3倍
高学年	1.13%	2.14%	1.66%	1.90%	3.24%	4.36%		3.9倍
小学生	0.65%	1.25%	1.59%	1.54%	2.71%	3.84%		5.9倍
中学生	2.99%	3.37%	5.12%	6.01%	8.81%	9.90%		3.4倍

不登校の要因



本人の心身の課題
（無気力、不安、発達特性、集団生活への不適応）

学校生活上の影響
（人間関係、いじめ等）

家庭環境や家庭方針
（母子分離、ホームエデュケーション等）

※要因は一人一人異なる。複合的になっていることが多い。
※近年は小学校低学年も増加傾向にある。
※専門職と連携した適切なアセスメントに基づく支援が必要。
※個別指導や居場所の確保など個に応じた支援が必要。

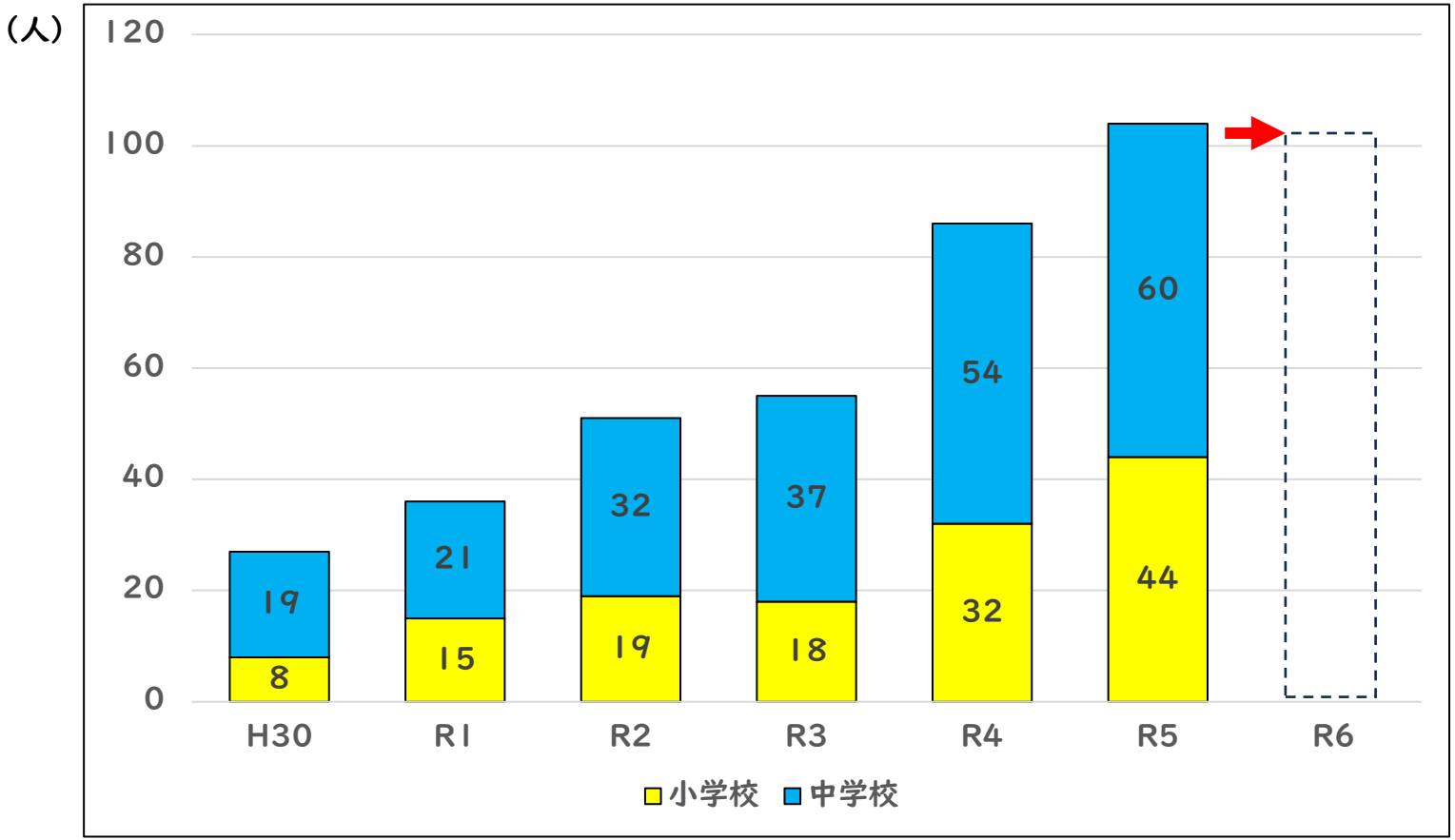
二宮町立学校の不登校児童生徒数の推移

	3小学校			2中学校			合計
	低	中	高	1	2	3	
令和5年度 4～12月	11	12	16	15	22	15	91
	39			52			
令和6年度 4～12月	17	16	14	10	16	19	92 (78)
	47		(35)	45		(43)	
前年比	8			▲7			1

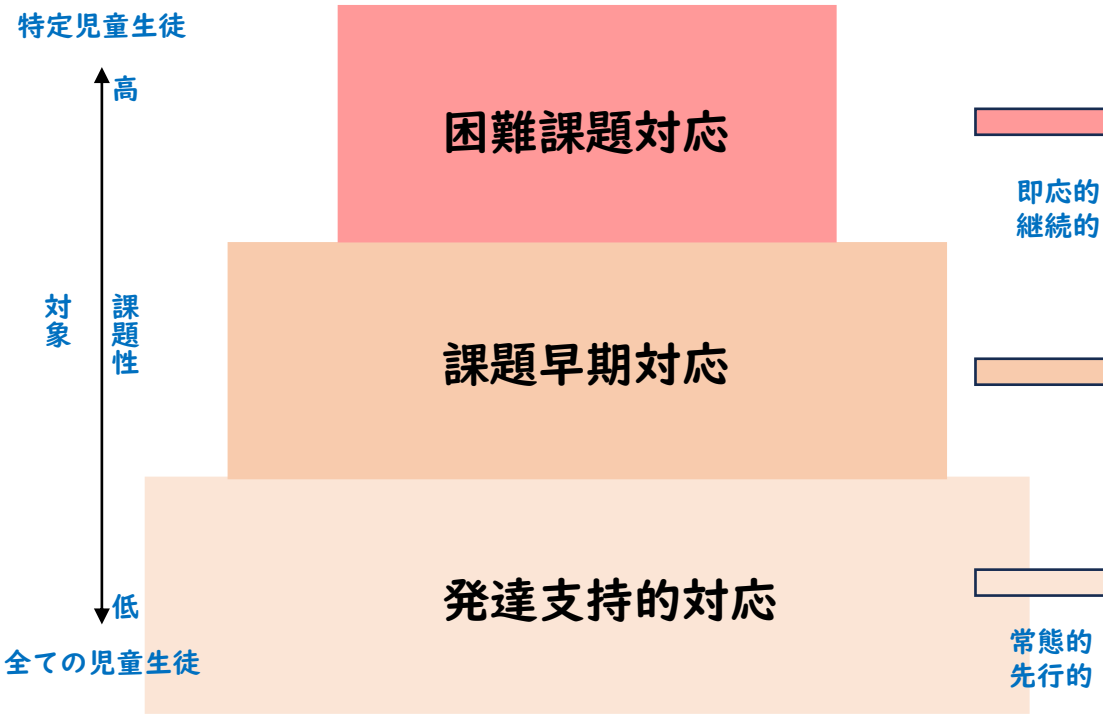
※（　）の数値は、昨年度に続き、不登校になっている児童生徒の数

上記児童生徒の欠席日数	3小学校	2中学校	合計
令和5年度 4月～12月	3232	4207	7439
令和6年度 4月～12月	3541	3789	7330
前年比	309	▲418	▲109

二宮町立学校の不登校児童生徒数の推移



重層的支援構造モデル



町の取り組み

①メタバース学校(県)への参加
②フリースクール等との連携
③訪問型支援
④在籍に関する弾力的対応
⑤教育支援室の柔軟な運営
⑥ほっとルームの全校配置
⑦通級指導教室の拡充
⑧教育相談体制の充実
⑨スクリーニング実施
⑩スタートカリキュラムの推進
⑪小中一貫教育の推進
⑫GIGAスクール構想の推進
⑬高学年専科体制の推進（県）

通級指導教室の拡充

ことばの教室（そにっく）

開室：平成12年度～
対象：ことばや発音に課題を抱える児童
場所：二宮小学校に設置
方式：他校通級
配置：教諭１名
通室：19名（令和６年12月）
　　二宮16名　一色1名　山西2名
課題：保護者の送迎負担
今後：令和７年度より巡回方式を検討

まなびの教室（リエゾン）

開室：令和６年度～
対象：コミュニケーション等に課題を抱える児童
場所：小学校３校に設置
方式：巡回方式（自校通級）
配置：教諭１名
通室：15名（令和６年12月）
　　二宮５名　一色７名　山西３名
今後：令和７年度より２名配置を検討

成果（子ども、保護者、教員からの声）
・子どもが学校へ登校できるようになった。
・学校でのトラブルが減った。
・サードプレイスになっている。
・リエゾンの時間が楽しい。
・家庭内でも落ち着きが見られるようになった。

課題
・各校の通室生のばらつき（基準のばらつき）
・安定的な運用（フローの整理）
・研修機会の確保（町内、町外）
・学習環境の充実
・中学校進学後もリエゾン通室を希望する生徒への対応

早期発見・早期対応の例

- 少人数の機動的連携型支援チームで方針、役割分担検討
  その後、関係職員と共有する。
- 早めのアセスメント、支援内容の共有
- SC、SSWによる面談（児童生徒・保護者）
- ほっとルーム、リエゾン等、校内の居場所の充実
- 教育支援室、民間フリースクール、福祉関係課等との連携
- 教育課程編成上の工夫

環境整備とマインドセットが好循環を生み出す

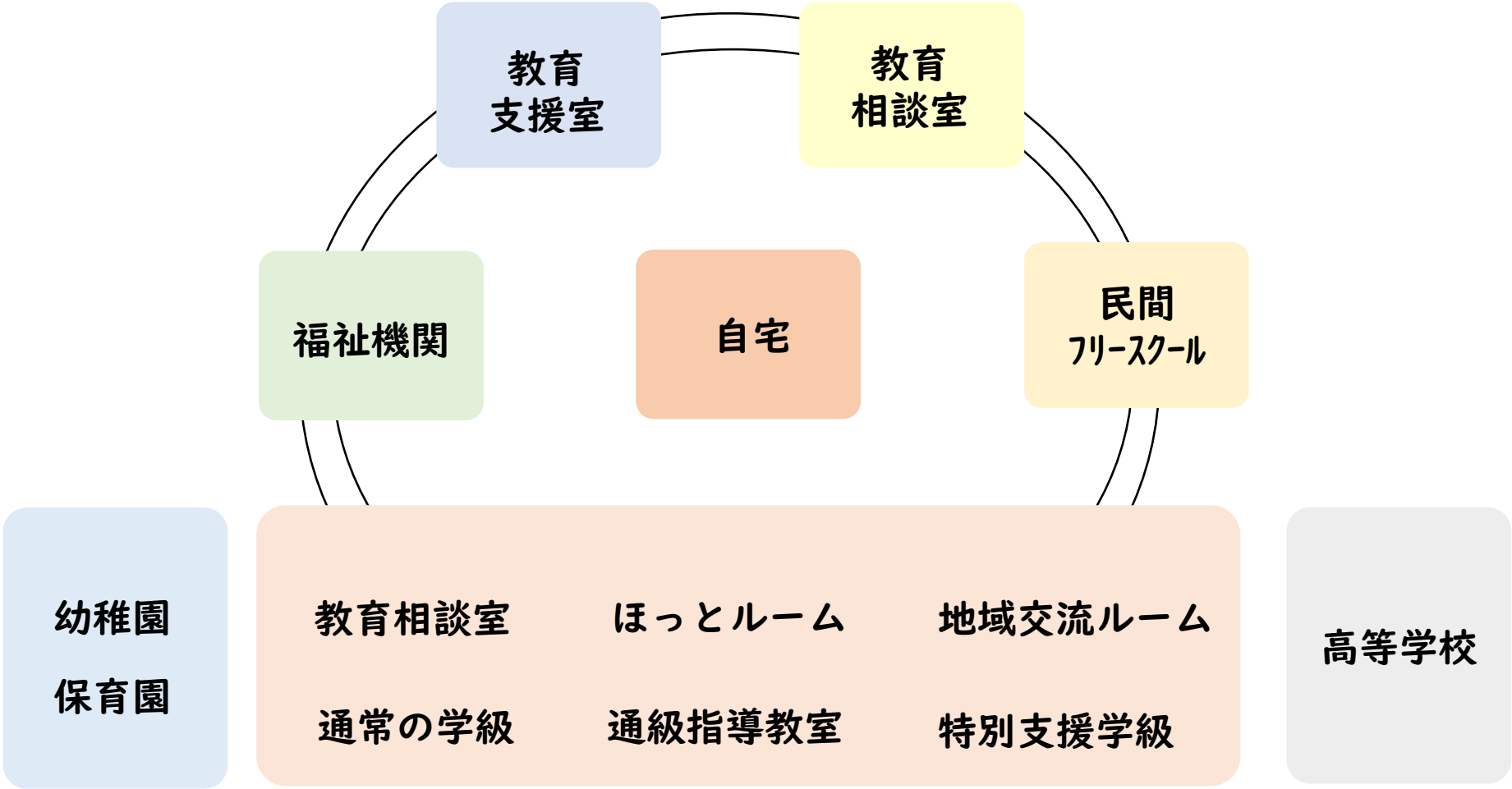
令和６年度 ほっとルームの活用状況

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計	全児童生徒数	支援員配置	備考
二宮小学校	12	4	1	4	0	0				21	656	0.5	通級
一色小学校	4	3	1	1	6	0				15	164	2	
山西小学校	1	3	0	2	0	1				7	315	1	
二宮中学校							3	4	2	9	363	0.5	SC重点
二宮西中学校							2	3	5	10	217	1	

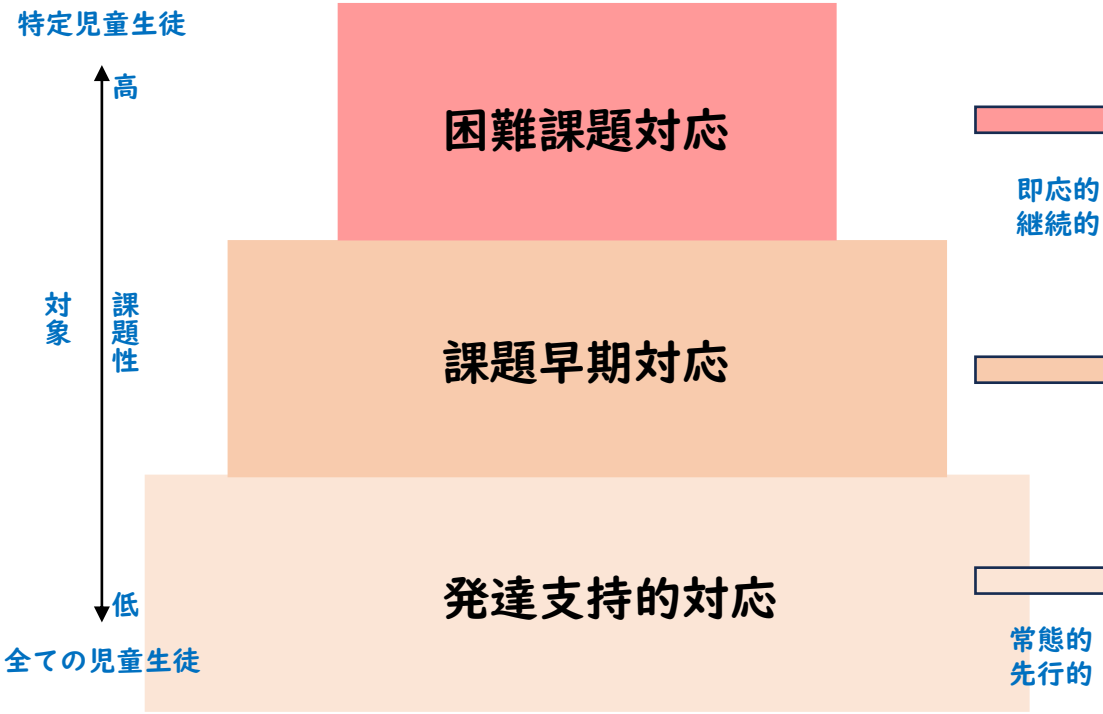
（令和７年１月現在）

成果（教員からの声）
・ほっとルームで得られる安心感が登校への動機づけや自分の教室に戻るきっかけになっている。（ほっとルームがなかったら、欠席になっていた。）
・不登校の未然防止につながっている。
・特定の場面での困難さを示す児童生徒の居場所になっている。
・教職員や支援員の児童理解の場になっている。
・ほっとルームがあることで、校内をふらふらと歩き回ることがなくなった。教職員もどこにいるかわかるため、安心できる。
・利用する予定になっていたが、結果的に教室で過ごすことができた児童もいた。（ほっとルームの存在自体が安心感になっている）
・昨年度、利用していたが、今年度は学級で過ごせるようになった児童もいる。
・学習意欲のある生徒は、ほっとルームで自主学習を進めることができている。

課題（教員からの声）
・ほっとルームの利用目的の周知（保護者、子ども）
・個別（ほっとルーム）と集団（在籍する教室）とのバランス感。
・教室が不足し、専用の教室を用意できない学校もある。
・毎日開室できない。そのため、必要性はあるけど周知しづらかった。子どもにとっては、「きついけど我慢するしかない」「それなら休もう」になってしまうケースもあり、もどかしかった。学校として「いつでも空いている場、いつでも行ける場」として整備することが重要であり、そのための人材確保が必要。毎日（午前と午後）、開室するためには少なくとも２名必要。
・ほっとルームに教員を配置すると、特別支援学級の体制が手薄になる。
・子どもと担当職員の信頼関係が重要。普段は支援教育補助員として過ごし、必要時にほっとルーム対応職員になるなど柔軟な運用ができるとよい。
・同時に複数名の児童生徒が利用する際の工夫や配慮が必要。
・利用する生徒の学習状況を把握し、いかに成績をつけていくかが課題
・ほっとルームから次へのステップになかなか進めないケースもある。


教育
支援室
教育
相談室
福祉機関
自宅
民間
フリースクール
幼稚園
保育園
教育相談室
ほっとルーム
地域交流ルーム
通常の学級
通級指導教室
特別支援学級
高等学校

重層的支援構造モデル



町の取り組みの強化

①メタバース学校(県)への参加
②フリースクール等との連携
③訪問型支援
④在籍に関する弾力的対応
⑤教育支援室の柔軟な運営
⑥ほっとルームの全校配置
⑦通級指導教室の拡充
⑧教育相談体制の充実
⑨スクリーニング実施
⑩スタートカリキュラムの推進
⑪小中一貫教育の推進
⑫GIGAスクール構想の推進
⑬高学年専科体制の推進（県）